ISSN 0388－5569
VOL. 13 No. 2
（通巻38号）
1992. 6

Library News

山口大学附属図書館報

目次

山口大学図書館の将来　千葉　喜彦……1
論文とつきあう　宇佐美謙治……4
平成4年度附属図書館関係各種委員会
　委員名簿……5
お知らせ……6
寄贈図書……7
人事異動……7
日　誌……7
平成3年度図書館統計表……8

山口大学図書館の将来

千　葉　喜　彦

これは、山口大学図書館の将来について、教職員、学生の皆さんの間から活発な議論が起こることを期待して書いたものである。館長に就任してわずか2箇月の私には、図書館について貧弱な知識しかない。しかし、昨今の社会あるいは学内の情勢を観察し、また、館長任期の短さを考えると、充分な知識を得たうえで展望を語るほど悠長な気分にはなれない。

私は、図書館の将来を展望するうえで見逃すことのできない社会要因が少なくとも3つあると思う。**大学大綱化にともなう大学改革、電算化システムの驚異的な発達、それに印刷物とくに外国雑誌の急速な値上がり**である。これらを考慮に入れて、山口大学図書館の将来を予測するとき、それはどのような姿になるであろうか。

以下に述べることが、この問題について学内世論を喚起する刺激になることを強く望んでいる。皆さんの議論によって、私の未熟さが補われ、最終的に大学発展に貢献しうる図書館の具体的な将来像について合意が得られれば、それに越したことはない。

山口大学図書館の課題

学問・研究に携わる人たちは昔から、学術情報の収集にそれぞれ工夫をこらしてきた。しかし近年、個人の家内手工業的工夫だけでは対応できない状況が生れている。例えば、分野によって幾分状況は違うかもしれないが、一般的に、研究成果の公表の形が多様化し、量が著しく増えている。また、価格の高騰が、とくに欧米学術誌の購入・維持を難しくし、増やすべきものを逆に減らさざるを得なくなっている。もともと、予算規模が充分でないことなどのために、図書館で直接手に入る情報は慢性的に不足してはいたが、このままでは、ますます不足してくる可能性が強い。状況改善のための努力が、これまで以上に必要であろう。

一方、一般社会も学術情報に強い関心を払っている。例えば産業界は、独創的な学問・研究の成果を広く求めているし、教育機関は生徒、学生の進路指導に学術情報が有効に利用できる仕組みを望んでいる。個人の生活のレベルにおいても、人々は自らの向上のために盛んに知識を求めている。学問の場合と同様にこれらの欲求は本質的には古くからのものであるが、その

度合いも近年急速に高まっているように思われる。学術情報の単なる集散地でなく、創造の場でもある大学には、その流通に関して社会的な責任がある。そして、図書館が責任の具体的な担い手となるべきである。

昨年、大学設置基準の大綱化が実行に移された。大綱化は大学のあり方を本質的に問うものになっており、各大学が独創的な教育・研究体制を考案することを勧め、自らの点検・評価によって質を高める努力を続けることを求めている。大綱化の根底には、大学の評価に競争原理を導入するという思想がある。図書館は自らを点検・評価しながら、困難が予想される大学改革の中で果たすべき役割を明らかにしていかなければならない。

第一に、学術情報の蓄積・伝達に関して、学内外の要望に応えること。第二に、自己点検・評価に基づいて、大学の改革に貢献する道を探ること。この二つはおそらく、どの大学の図書館にも共通する課題であろう。とすれば、山口大学図書館としての独自性をどこに求めるか。これが第三の課題である。

第一の課題：学術情報の蓄積・伝達

社会はこのところ急速に、情報が支配する形に変りつつある。この変遷は、膨大な電子情報を広い範囲に短時間で伝達することを可能にし、学術情報の流通機構にも画期的な変革をもたらした。この変革が山口大学図書館にも及び始めたのは、1970年代からである。爾来、電子情報の蓄積が進むかたわら、本館、医学部分館、工学部分館の三者を情報処理センターを介して結ぶ電算化システムの完成に努めている。また学外的には、1986年、大学共同利用機関である「学術情報センター　NACSIS：National Center for Science Information Systems」を中心としたネットワークに加入するなどして、情報提供を受けられる状態になっている。

NACSISは、全国的・総合的な学術情報システムの整備を推進する中枢的な機関を目指して、科研費研究成果概要、学術雑誌総合目録、学会講演要旨、学術論文等々の学術情報のデーターベース化を精力的にすすめている。そこを中心にしたネットワークは全国の大学だけでなく、国外にも延びて米国国立科学財団、英国図書館などともつながっている。5月26日、国立大学図書館協議会理事会の前日、私は中島周二事務部長と、茗荷谷の東京教育大学の跡地にあるNACSISを訪れて、事業内容について勉強する機会を得、そこがきわめて利用価値の高いものになりつつあるという印象を受けた。

4月16、17の2日間、中国・四国大学図書館協議会が愛媛大学の当番で開かれた（来年は山口の番である）。国公私立44大学が参加する、なかなかの規模の会議である。会議のさまざまの局面で、図書館の将来が話しあわれたが、国立大学館長部会では、学術情報の処理伝達機構を情報処理センターと一緒になって築く可能性が主要な話題になった。情報処理センターの協力を得て学内のネットワークを構築し、学外的にはNACSISあるいはそのほかの学術情報ネットワークを活用する仕組みを発展させることによって、第一の課題はかなりの程度解決できるであろう。

学術情報には、単行本または学術誌のようにオリジナルなもの（一次資料）、論文抄録、講演要旨などの二次資料、検索のための目録だけというように段階がある。そのほか新聞、雑誌なども学術情報の運び手である。これらの全てが、原理的には電算化システムで処理できる。しかし実際には、経費などの制約から、ただちにそれができるのは、検索目録と二次資料の一部である。最も大事な一次資料については、検索によって所在を調べ、そこになんらかの方法で請求することになる。外国雑誌については、外国学術誌を専門分野に分けて特定大学に集中させるセンター構想が、文部省の手で実行されており、この施策は今後も続くと思われる。欲しい情報が直ちに手元で得られるのが理想である。私がいたことがある米国の二つの州立大学では、この理想に近い状態があった。しかしそれが無理な場合については、電算化が進んだ今日、情報の種類によっては全国のどこかに集中させる構想がでてくるのは自然の流れであろう。また集中させるからには、そこですべてのものが入手できる状態を作るべきである。

しかし所在が分かったとしても入手が難しい単行本のような場合は、実物を手元で充実させ

るほかない。第一の課題は情報社会特有の高度な技術によって徐々に解決しつつあるが、その限界も配慮しながら、今後の問題を整理するとすれば、大筋つぎのようになるであろう。

1．大学内・大学間の電算化ネットワークをさらに強力なものにすること。
2．それにそって学術情報の種類、内容などの整理を行なうこと。その場合、電算化の限界、キャンパス間での資料の集中化などを配慮すること。
3．一般社会にサービスする方策をたてること。

第二の課題：大学改革と図書館

第二の課題を明らかにするのはこれからである。山口大学では、設置基準の大綱化をうけて、昨秋から教育・研究体制の改革に関する特別委員会（第一委員会）が発足した。この委員会は、学長と学部・教養部からの委員各２名（うち１名は学部・教養部長）からなり、カリキュラム及び組織を考える二つのワーキンググループに分かれて活動している。自己点検・評価の結果に基づいて、独自の教育・研究組織を確立し、18歳人口の激減などの厳しい環境の中で生き残る方法を考えるわけであるから、それは誠に困難な事業になるであろう。ほぼ半年を経て、ともかくも改革が必要という点で全学の一致をみたことは一つの前進である。

図書館はいろいろな学問分野の情報をそろえて、学内の教育・研究活動の役に立つことを目的としており、本来、総合的組織である。３つのキャンパスに分かれている状態は総合性にさからうものであるが、それによって情報の流通が妨げられている状況が、情報処理センターの協力を得て改善されつつあることはすでに述べた通りである。

新しい仕事として、学内の教育・研究情報をデーターベース化して内外の要望に応えるのも大事かと思う。図書館が総合性を保ちやすいのには幾つかの理由がある。それは、なんといっても必要性がよく理解されていることであろう。二つめは、運営の方法にあるのではないかと思う。全学から選ばれる館長がただ一人の教官で、そのほかに事務職員と専門職員がいる。運営は、学部などの教官で構成する委員会（附属図書館運営委員会）を館長の下におくことによって行われる。すなわち、学部等の希望、意見などを調整しながら、主として全学から集まる学術情報を専門の職員が管理し、誰に対してもサービスをする。図書館は、おもてに現れた部分であって、その組織は実際には全学に広がったものである。これは、中立性を保ちやすい制度でもある（館長が学部から離脱すれば、中立性はもっと高まると思うが）。

学術情報を、学部とか学問分野をこえて、円滑に入手できるように極力努めるという従来の路線は、大学改革において、中央図書館を中心として強まることはあっても弱くなることはありえない。これが、山口大学の総合性（改革の柱の一つである）に貢献するための、図書館の基本的な考え方である。

一方、期せずして（？）総合性を維持してきた図書館は、大学総合化のモデルになりうるものをもっている。複数のキャンパスが離れている状態を、電算化システムによって有機的につなげていることがその一つであることはいうまでもないが、実は、運営制度にも学ぶべき点があると思う。例えば、一般教育の必要性が高く、それに関する組織を全学的に作らなければいけないという強い共通認識が生れたとしよう。そのために「一般教育局」ともよべる組織を作る。構成は図書館に似せて、目に見える部分は局長（学部籍がなく、全学の教官から選ばれる？　継続性が大事なので任期は余り短くなく５年ぐらい？）と事務組織だが、実際の運営方針は教官組織から選ばれた運営委員の協議で決める。ここでは、授業が図書に相当することになる。このような構図から出発して、一般教育を扱う総合的組織を考えだすことができないだろうか、と思う。

お気づきと思うが学生部の構造も図書館に似ている。ちなみに、国立学校設置法施行規則には、教養部長を大学の教授から選ぶようになっていて、とくに教養部の教授からとはなっていないのも、共通性、総合性を考えてのことかもしれず、もし、このような選び方がなされていれば、一般教育の姿も、今日問題とされるようなものでなくなっていた可能性がある。

図書館は従属的組織だということをしばしば

耳にする。つねに学内の要望にこたえて、教育・研究支援体制を整える努力をしている図書館の一面は、たしかに従属的である。しかし、総合性は必然的に従属性を伴うものであることを述べておきたい。総合は、己れをある程度殺して、全体のために従属することがあってはじめて成り立つ。

さて、社会や学内の情勢との関係において、図書館の将来を考えてみたが、第三の課題までには行きつけなかった。ほかの大学にない独自性を第一、第二の課題の中に与えるのか、あるいは、新しい課題の中にみつけるのか。いずれにしても、冒頭に述べたように、この書き物には未成熟な点が多いはずである。ぜひ皆さんのご意見を、どんな方法ででもお聴かせいただきたい。

（内線電話：館長室 776、研究室 388）

（附属図書館長、理学部教授）

論文とつきあう

宇佐美　謙　治

「本づくりには限りがない」とは旧約聖書にある有名な言葉である。出版事業の本性を3000年以上も昔に看破した洞察力に脱帽する。森本哲郎さんが「書物巡礼記」という本の中で、エール大学付属図書館が蔵書の増加傾向を過去100年間にさかのぼって調査した時の話を紹介しておられる。それによると、本の増加は16年で倍になっていくのだそうである。この経験則に従うと、1938年の時点で同大学図書館の蔵書数は約275万冊だから、2040年には２億冊になる。275万冊の書物でさえ書棚の長さが148kmだというから、２億冊となると、単純計算で約11,000kmとなるわけだ。これだけの本を収納するのに、想像できぬくらいの巨大な図書館が必要となるのだが、我が国最大の図書館、国会図書館は国内で出版された書物を全て納本する制度をとっているので、いずれは上の事が問題となるだろう。因みに、1991年３月末日での同図書館の蔵書数は6,332,228冊で、これに支部図書館分の3,914,248冊を加えると１千万冊を優に越す。しかも上の経験則は調査当時のアメリカの出版業界の事情を背景にしてのものだから、ワープロ、パソコン、さらにはコピー機が普及した現在では、もっとペースが上っているものと確信する。収納対策の一つとして、出版物をマイクロフィルム化やCD-ROM化しようという気運があるが、人間の視覚と思考の関係を考えあわせると、やはり紙面に活字というメディアは当分なくならないと思う。だから蔵書の収納問題は今後も関係者を悩ますことだろう。

ついでに学術雑誌の数について触れてみよう。雑誌 Nature (1973) に欧米における生化学関係の雑誌の登録数を調べた論文がある。これによると、1877年に Hoppe-Seyler's Zeitschrift für physiologische Chemie が最初に登場して以来、1900年までに４誌、1920年23誌、1940年77誌、1960年201誌、1968年262誌と増加している。先に述べた蔵書の増加率を上回る数ではないか。科学が発展するにつれて、研究者人口が増加し、専門領域の細分化がおこる。そうなると必然的に、既刊の専門誌では扱わないような内容の論文が投稿されるので、新分野用の専門誌が要求されることとなり、新しい学術誌が世に出るのである。

ともあれ我々研究者は出版物の大洪水に否応なしに見舞われているわけだ。そこで論文に的を絞り、論文との付き合い方を考えてみよう。研究者は総説を書く時以外、文献屋に停まることは許されない。理論系であろうと実験系であろうと、手を動かさねばならない。ところが実験を始めると、他人の論文に頭が回らなくなる。かと言って手だけを動かしていたのでは、研究内容の幅が狭くなる。しかし読み過ぎると、論文に圧倒され、時には臆病になる。実験と抄読

の両立が必要になるのである。

論文との付き合い方には次の二つがあるようだ。一つは自分の研究を進める上で必要な論文を読む場合。一つはセミナリー等の話題提供のために読む場合である。前者は自分の研究成果に直接関わってくるので、いい加減な読み方はできない。とりあげる論文は信用のおける研究者の、しっかりした物であるのは当然のことである。

植物生理学者の田宮博先生が名言を遺しておられる。「物事を知り過ぎては独創性は鈍り勝ちである。しかし物を知らなくては何も産み出すことができない。自分で何も仕事をしないで、他人の論文をあまり沢山読むのはいけない。人の論文を読むことも、修練を積むことも、何か自分自身で独自の仕事をやりながらすべきである。自分の中に創意の渦巻きが生まれ出すことが第一である。そうなれば他人の仕事はいくら読み聞きしても、独創的な渦巻きの栄養とはなれ、独創性を鈍らせることにはならない」さらに田宮門下の藤茂宏先生曰く、「実験には出発・低迷・展開・完成期といった4つの時期がある。実験と抄読の比率は、出発期4：6、低迷期9：1、展開期6：4、完成期4：6と割り振るべきだ」と。両先生の言葉でカテゴリー①の付き合い方は言い尽くされている。ただし次のことを補足したい。我々は活字になったものを過大評価する傾向がある。ところが一流雑誌の掲載論文でも結構眉唾物がある。これを見抜くには経験に頼るより方法がない。中には著者らが実験したとは到底考えられぬ論文がある。目前で実験をやってもらえれば、真偽が明らかになるのだが。この点で、実験をしながら読めという指摘は大切な事柄だと思う。

次は第二のカテゴリーの抄読法である。自分の専門外の、他人の論文を、時間を使って紹介するというのはどちらかというと苦痛だ。第一専門外の論文を正しく紹介できるはずがない。正しく紹介しようとして、準備に時間を掛け過ぎ、肝心の研究にマイナスになっては意味がない。そこで各人の負担を軽くしようと、雑誌を選択しておき、各雑誌の抄読分担者を決めて処理するという方法がある。しかしこの方法でも、論文が多くなると紹介するのは大変だ。それならば、タイトルだけではどうか。これでは内容がわからない。そこで①雑誌を限定し、その雑誌以外の掲載論文は切り捨てる。②フォローすべき研究者を決め、この研究者とそのグループの論文は読む、という限定された雑誌と人物の、二元検索法はどうであろうか。ここで大切なことは、セミナーはその論文の執筆者でない演者からの話題提供である事をまず肝に銘じ、演者に対し必要以上に論文内容を尋ねるべきではないことである。セミナーの後に自分で調べるべきである。

①②よりももっといいのは、他人の論文が参考にならぬほど、独創的な研究をすることだ。これならば、大洪水を気にしないでもよくなるのだが、それは夢のまた夢である。どうやら「学問に王道なし」の諺どおり、試行錯誤を繰返し自分なりのスタイルを確立していくより方法はないようである。　（医学部講師）

平成4年度附属図書館関係各種委員会委員名簿

（平成4年6月1日現在）

◎印は委員長

◇運営委員会

◎千葉喜彦（館長）
高橋學（医学部分館長）
土屋晉（工学部分館長）
柴田勝二（人文学部）
井上三朗（人文学部）
林恒徳（教育学部）
佐々木洋城（教育学部）
藤原貞雄（経済学部）
中山知巳（経済学部）
小宮克弘（理学部）
君波和雄（理学部）
福本哲夫（医学部）
中川浩二（工学部）

梶　原　忠　彦（農学部）
井　上　　武（農学部）
道　廣　泰　倫（教養部）
谷　口　　仁（教養部）
森　松　光　紀（附属病院）
河　野　庸　二（医療技術短期大学部）

◇本館図書委員会

◎千　葉　喜　彦（館長）
澤　谷　昭　次（人文学部）
高　木　智　見（人文学部）
堂　野　佐　俊（教育学部）
佐々木　洋　城（教育学部）
藤　原　貞　雄（経済学部）
中　山　知　巳（経済学部）
田　頭　昭　二（理学部）
村　上　柳太郎（理学部）
梶　原　忠　彦（農学部）
井　上　　武（農学部）
青　島　　均（教養部）
森　　茂　暁（教養部）
中　島　周　二（事務部長）

◇医学部分館図書委員会

◎高　橋　　學（分館長）
福　本　哲　夫（基礎）
森　松　光　紀（臨床）
佐　田　英　明（基礎・助講）
小　田　裕　胤（臨床・助講）
河　野　庸　二（医療短大）

◇工学部分館図書・研究報告委員会

◎土　屋　　晉（分館長）
上　西　　研（機械）
松　崎　浩　司（応化）
田　村　洋　一（社会建設）
久　保　　洋（電気電子）
久　井　　守（知能情報）
池　田　　攻（機能材料）
弥　永　　学（共通）

お知らせ

土曜日は図書館で

国の行政機関は、５月からすべての土曜日が休みとなりましたが、山口大学附属図書館は、土曜日も今までどおり開館しています。開館時間は下記のとおりです。但し、山口大学の休業期間中の土曜日は休館となります。

記

開館時間	本　　館	８：30～16：30
	医学部分館	８：30～18：00
	工学部分館	９：00～17：00

文献複写等の入手日数が短縮されました

本年４月からスタートした、学術情報センターのＩＬＬ（Inter Library Loan）システムは、図書館間での文献複写の依頼・受付及び図書の借用・貸出の連絡が、端末機を使ってできるようにしたものです。

今までは、教官及び学生等から文献複写の依頼、図書の借用申込みがありますと、所蔵大学図書館を調査し、郵送で依頼していました。しかし、このシステムは、学術情報センターのデータベースを検索して、所蔵大学を確認の後、端末機で直接、所蔵館へ文献複写等の依頼が可能となり、入手が促進されました。本学にない資料の複写物等の入手までに要する日数は、従来より、かなり短縮されます。

寄贈図書

（本　　館）

佐々木　　衛（人文学部助教授）

近代中国の社会と民衆文化　佐々木衛編　東方書店　1992

（日中共同研究・華北農村社会調査資料集）

唐　津　邦　利（教育学部教授）

現代っ子の体力と持久走　澤田芳男　金守新一　唐津邦利編　第一法規　1982

３分間健康処方箋　唐津邦利著　熊本日々新聞社　1988

シルバーエイジの健康体操　唐津邦利著　文園社　平成２

馬　渡　淳一郎（経済学部教授）

三者間労務供給契約の研究　馬渡淳一郎著　総合労働研究所　1992

千　葉　喜　彦（理学部教授）

時間生物学ハンドブック　千葉喜彦　高橋清久編　朝倉書店　1991

（医学部分館）

水　田　　實（元医学部助教授）

胆汁　水田實著　1992

人事異動

〔併　任〕（4.4.1）	千　葉　喜　彦	附属図書館長（理学部教授）
〔配置換〕（4.4.1）	高　田　美栄子	医学部分館整理係（情報処理センターから）
	渡　辺　早　苗	（医学部分館整理係）　医学部総務課人事係へ
〔採　用〕（4.4.1）	重　本　日登美	情報管理課整理係
〔退　職〕（4.3.31）	竹　尾　和　典	（附属図書館長）
	原　田　節　子	（情報管理課整理係）

日　　誌

２月５日（水）　医学部分館図書委員会

２月28日（金）　経済学・商学視学委員による図書館視察

３月13日（金）　平成３年度附属図書館職員研修会：これからの大学図書館

講師　群馬大学附属図書館長　若　林　克　己

３月23日（月）　第60回附属図書館運営委員会、第32回本館図書委員会

３月26日（木）　医学部分館図書委員会

４月16日（木）　第40回中国四国地区大学図書館協議会総会（東京第一ホテル松山）

４月17日（金）　第19回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会（東京第一ホテル松山）

４月20日（月）　文献検索講習会（医学部分館）

４月24日（金）　第61回附属図書館運営委員会、第33回本館図書委員会

４月28日（火）　工学部分館図書・研究報告委員会

５月18日（月）～６月12日（金）　資料展：東西鑑賞名畫集

５月25日（月）　平成４年度国立大学附属図書館事務部課長会議（東京医科歯科大学）

５月27日（水）　国立大学図書館協議会理事会（東京大学）

５月28日（木）～29日（金）　第63回日本医学図書館協会総会（小倉）

平成3年度図書館統計表

Ⅰ　蔵　書　数（平成4年3月31日現在）

区　　分	図　書（冊　数）			雑　誌（種類数）		
	和	洋	計	和	洋	計
本　　館	749,014	291,838	1,040,852	8,432	3,577	12,009
医学部分館	77,596	70,413	148,009	1,242	1,177	2,419
工学部分館	79,040	47,325	126,365	1,398	1,291	2,689
計	905,650	409,576	1,315,226	11,072	6,045	17,117

Ⅱ　年間受入数

区　　分	図　書（冊　数）			雑　誌（種類数）		
	和	洋	計	和	洋	計
人文学部	2,491	1,124	3,615	253	186	439
教育学部	5,360	1,270	6,630	388	260	648
経済学部	5,725	2,000	7,725	1,288	647	1,935
理学部	168	696	864	45	218	263
農学部	585	274	859	89	123	212
教養部	2,173	1,252	3,425	203	345	548
学生相談所	0	0	0	0	5	5
保健センター	43	2	45	9	2	11
埋蔵文化財資料館	0	0	0	8	0	8
本　　館	3,171	634	3,805	2,166	404	2,570
小　　計	19,716	7,252	26,968	4,449	2,190	6,639
医学部分館	1,696	1,964	3,660	819	664	1,483
工学部分館	2,054	1,620	3,674	729	519	1,248
合　　計	23,466	10,836	34,302	5,997	3,373	9,370

Ⅲ　利用統計

区分	開館日数（日）		入館者数（人）			館外帯出者数（人）			館外帯出冊数（冊）		
	時間内	時間外	時間内	時間外	計	時間内	時間外	計	時間内	時間外	計
本館	290	189	223,824	35,893	259,717	24,611	5,353	29,964	45,244	10,790	56,034
	一日平均		772	190		85	28		156	57	
医学部分館	294	259	38,658	19,747	58,405	9,530	7,393	16,923	20,195	15,019	35,214
	一日平均		131	76		32	29		69	58	
工学部分館	288	191	83,500	18,582	102,082	8,378	3,175	11,553	14,061	5,094	19,155
	一日平均		290	97		29	17		49	27	

Ⅳ　文献複写（件数）

区　　分		学内者			学外者	他大学等			合　計
		私費	公費	小計	私費	私費	公費	小計	
電子式複写	本　　館	2,274	253	2,527	201	803	1,233	2,036	4,764
	医学部分館	6,321	8,758	15,079	10,478	1,671	1,698	3,369	28,926
	工学部分館	56	18,648	18,704	83	74	866	940	19,727
	合　計	8,651	27,659	36,310	10,762	2,548	3,797	6,345	53,417
印画引伸	本　　館	0	0	0	0	0	0	0	0

編集・発行　山口大学附属図書館　〒753 山口市大字吉田　☎(0839)22—6111　内線788